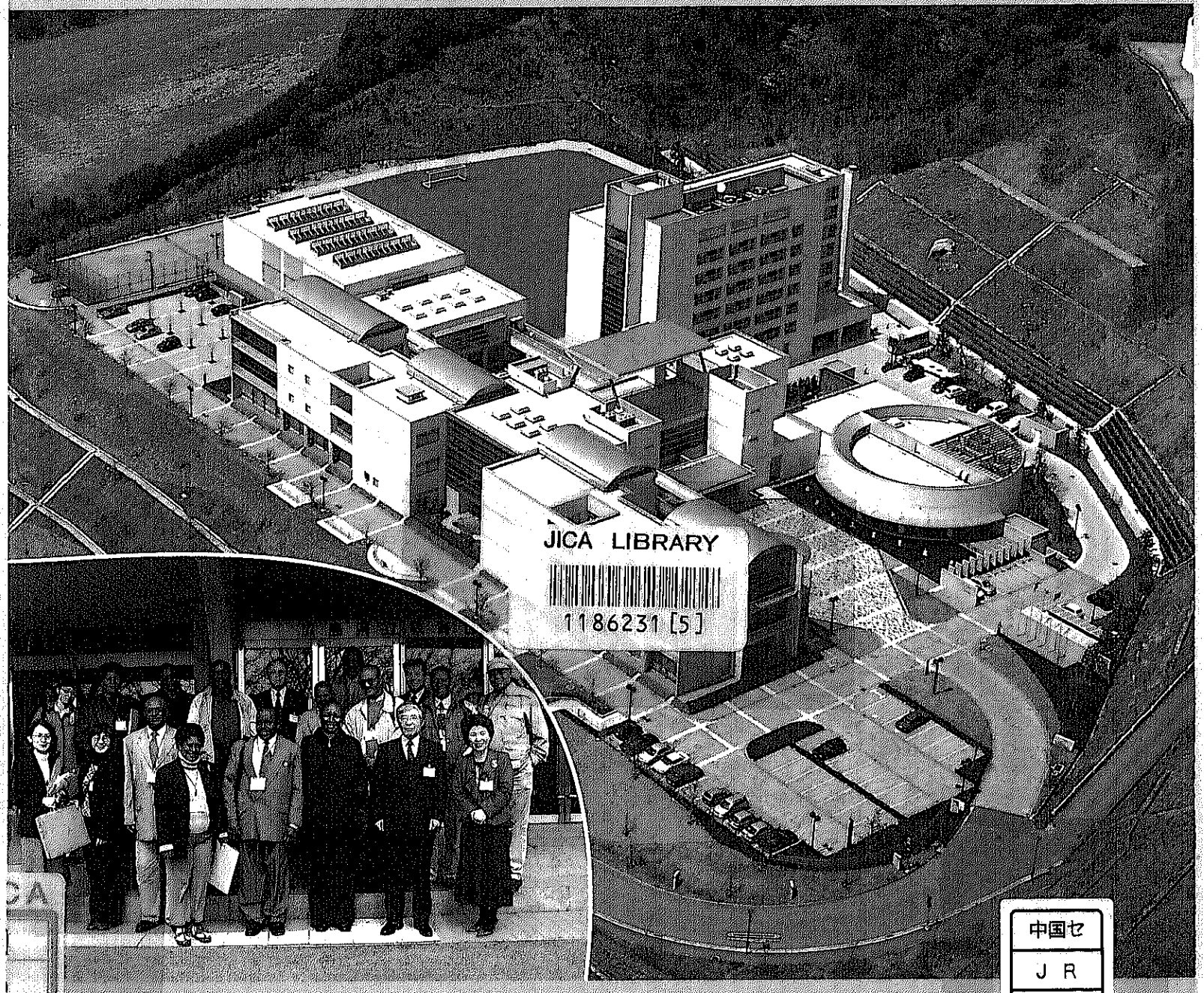
独立行政法人　国際協力機構

中国国際センター

平成17年度 活動レポート



JICA LIBRARY
1186231 [5]

中国セ
J R

平成18年

JICA中国活動レポート／目次

—はじめに— …… 1

第１部　各事業の活動報告 …… 2
　１．研修員受入事業 …… 2
　２．青年招へい事業 …… 4
　３．海外ボランティア事業 …… 6
　４．草の根技術協力事業 …… 10
　５．開発教育支援・市民参加協力推進事業 …… 14

第２部　実績・参考資料 …… 19
　１．平成17年度事業実績 …… 20
　２．参考資料 …… 56

1186231 [5]

はじめに

この冊子は、独立行政法人　国際協力機構中国国際センター（JICA中国）の平成17年度の事業の概要を取りまとめたものです。

研修員受入事業では、JICA中国はこれまで、教育（特に初等中等教育）、平和構築（平成17年度より開始）、地方自治行政、環境などの分野で、開発課題別、地域別、国別という３つのタイプの集団型コースおよび個別研修員の受入を実施してきました。JICAでは、現在国内事業の改革を実施中ですが、特に開発途上国が抱えているさまざまな分野の開発課題に対応するために、全国に18ある国内機関それぞれに、「分野特性」を設定しました。当センターの分野特性は、広島大学等の連携協力や広島の被爆体験や戦後の復興経験を踏まえて、「初等中等教育」および「平和構築」の２分野が設定されました。JICA中国では、今後この２つの分野での研修員受入事業に力を入れていく所存です。

青年招へい事業は、アフガニスタン、アフリカ混成(仏語圏)、中国など10グループを受け入れました。国外で展開する草の根技術協力事業では、新たに７件を採択し、前年度からの継続案件も含めると11件を実施しました。

平成17年度に派遣された中国地方５県からのボランティアは、約120名（青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、日系社会青年ボランティアおよび日系社会シニアボランティアの合計）に達し、現在アジア、アフリカ、中南米、大洋州などで活躍しています。JICAボランティア事業に参加しやすい環境を整備するために、民間の方、公務員、現職教員を対象とした現職参加促進や市町村に勤務する職員に関する「派遣条例」の制定促進を引き続き働きかけていくつもりです。

開発教育支援関連では、国際協力出前講座が前年度に同様、中国地方５県で200件を超え、また教師海外研修や高校生国際協力体験プログラムも、参加者から好評を得ることができたと考えています。

JICAが、平成15年８月から、全国47都道府県で開催している平和と国際協力について考える「ピース・トーク・マラソン（～一人ひとりにできること。一人のためにできること～)」では、平成17年７月に広島、平成18年３月に島根で開催し、今後鳥取と山口での開催を予定しています。

JICA中国が実施する事業は、研修員受入事業から、ボランティア事業、そして開発教育支援事業まで、多くの関係機関、関係者及び市民のみなさんのご理解、ご支援ならびにご参加があって成り立っております。JICA中国は、これからも中国地方の特色を活かした国際協力事業を展開してまいりたいと思いますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

平成18年６月
独立行政法人国際協力機構
中国国際センター
所長　生井年緒

第1部　各事業の活動報告

研修員受入事業

JICA中国では、開発途上国のそれぞれの専門分野で実務に携わっている技術者、研究者、行政官などを受入れて、研修の機会を提供しています。

平成17年度には、アフリカ向け平和構築分野での初の研修コースとして、シエラレオネ「平和復興国際協力セミナー」を実施しました。このように平和都市「HIROSHIMA」を生かした研修を積極的に行っています。また、広島大学との連携で初等・中等教育分野の研修コースを多く実施しています。

地域別研修（アフリカ）「研究と対話による自立的な基礎教育開発の促進」コースによる東広島市立板城小学校視察訪問

4月　17年度「沿岸漁業の統合的な管理手法」コース継続実施

5月　「廃棄物管理総合技術」コース開始

6月　南東欧「サポーティングインダストリー育成」、ボスニア・ヘルツェゴビナ「平和のための教育ネットワーク構築」コース開始

7月　「乾燥地水資源の開発と環境評価Ⅱ」、中東地域「上水道維持管理」、イラク「火力発電（ガスタービン）」コース開始

8月　「中等科学教育実技Ⅱ」、中南米地域「生活排水処理計画」、「魚類防疫・環境管理」、仏語圏アフリカ「教育行政」、「ガスタービン・蒸気タービン（石炭）火力発電」コース開始

9月　「観光開発と環境保全Ⅱ」、南アフリカ共和国「地方教育行政」、南西アジア地域「公害防止行政」コース開始

10月　シエラレオネ「平和復興のための国際協力セミナー」コース開始

研修員、東広島市の「酒まつり」に参加

11月　南アフリカ共和国「理数科教員養成者研修」、「社会的環境管理能力の形成と政策評価」、フィリピン「女性起業家育成支援」コース開始

12月

1月　「食品加工・保全技術Ⅲ」、南部アフリカ地域「中小企業育成」コース開始

2月　アフリカ「研究と対話による自立的な基礎教育開発の促進」、ケニア「INSET運営管理」コース開始

3月　インドネシア「国際収支・国際経済マネジメント能力強化」、「沿岸漁業の統合的な管理手法」コース開始

青年招へい事業

開発途上国の将来を担う青年たちを招き、日本の技術を伝え、日本との友情が築かれることを目的としています。青年たちは日本での１ヶ月の滞在の間、自分たちが自国で従事していること(例えば教育、保健医療、環境保全など)について、講義・視察・見学などを通じて学びます。青年招へい事業は、青年たちを受け入れる地域の皆さまによって行われています。日程のうちの「地方プログラム」と呼ばれる約一週間は、日本の文化に触れる、日本を理解するという意味では、一番内容の濃い期間となっています。

医療機器を見つめる目は真剣そのもの

4月

5月

中国・教育：(財)岡山県青年館

アセアン混成･社会福祉(障害者福祉行政)：世界青年徳山友の会

6月

タイ・教育（職業訓練）：広島YMCA学園

7月

8月

9月

アフリカ(英語)・保健医療(公衆衛生)：津山と世界を結ぶ会

10月

11月

中米(西語)・教育(理数科)：しょうばら国際交流協会

中国・公募(地域振興)：(財)三次国際交流協会

12月

1月

アフガニスタン・教育：(財)しまね国際センター

ネパール・教育(教員訓練)：(財)防長青年館

モルディブ・教育(初中等)：国際ネットワークしまね

2月

フィリピン・環境保全：宇部環境国際協力協会

3月

※国名・分野：地方プログラム受入団体

アフガニスタン青年を受け入れて

大西　千絵
（しまね国際センター　国際交流グループ）

平成15年の秋に公開された島根とアフガニスタンを舞台にした映画「アイ・ラブ・ピース」をきっかけに、昨年度に引き続き今年度も、アフガニスタングループを１週間受け入れました。前任者から交代し、私自身初めて中東圏の方たちの受入を担当することになり、少し身構えていました。というのも、食事やお祈りの習慣等文化が、ずいぶん違うということで、手配面でかなり気を遣うことになったからです。その上、前回の行政グループは、非常におとなしい人たちだったと聞いていたので、少し心配でした。

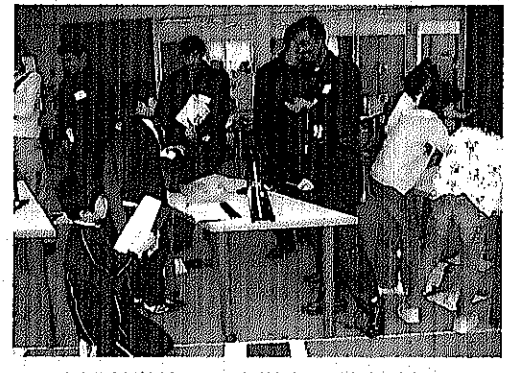
実際受け入れが始まってみると、19名中18名が教員（１名は行政職）という職業柄もあるせいか、とても積極的で親しみやすい青年たちばかりでした。彼らは、アフガニスタンの教育復興のために派遣されたという、人並みならぬ思いがありました。「学校と地域・家庭の連携」をテーマにした講義・視察では、アフガニスタンにはない現場での教育の取組みについて視察先の方に熱心に質問するなど、大変真剣な様子でした。地方プログラムの目玉、ホームステイでは、「１泊２日は短い。２泊３日でも良かった」という言葉も聞かれ、本当に文化の違いを乗り越えて交流できたのだと、嬉しくなりました。歓送会では涙を流す青年もいて、とても純粋な人達だと思いました。

ホストファミリーの皆様をはじめ、各視察先、講師の方に快く協力いただいたおかげで、東京での評価会では、招へい青年から地方プログラムについて高い評価をいただきました。こちらも今回の受入れを通し、彼らの誠実な人柄に教えられることが多かったように思います。

（しまね国際センター情報誌　まいるすとんず　Vol.57より転載）

<日　程>

1/16(月)～1/29(日)	入国、開講式～共通プログラム･都内プログラム（東京）
1/30(月)	東京→島根、オリエンテーション
1/31(火)	知事･教育長表敬、講義、松江市立持田小学校視察、交流の夕べ
2/1(水)	松江市清心養護学校・東部島根心身障害医療福祉センター視察、松江農林高等学校視察
2/2(木)	出雲科学館視察、堀川遊覧船乗船、和菓子つくり体験（カラコロ工房）
2/3(金)	【自主研修】茶道体験（陣山の郷）、しまね国際研修館視察
2/4(土)	ホームステイ
2/5(日)	ホームステイ、歓送会
2/6(月)	島根→東京、閉講式・評価会・歓送会
2/7(火)	帰国



出雲科学館での小学生理科実験視察

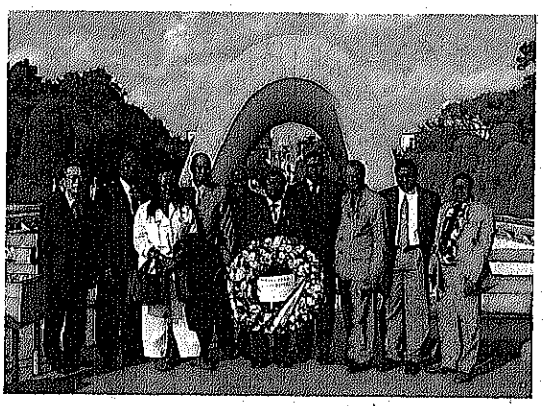
交流会：安来節どじょうすくい体験

シエラレオネ
「平和復興のための国際協力セミナー」

JICA中国では、2005年10月17日から11月２日までの約２週間、アフリカのシエラレオネから９名の研修員を受け入れました。同国は1991年から10年に渡って内戦を経験、現在復興に向けた国の再建が行われています。

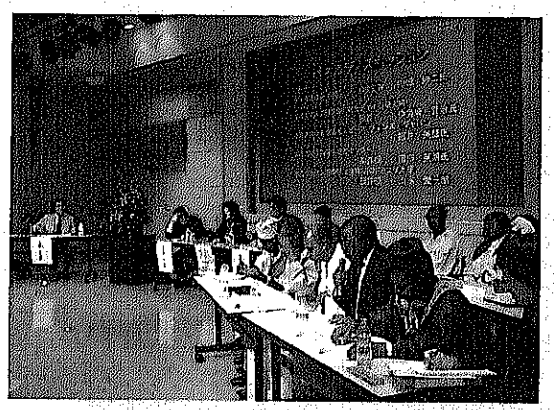
今回のセミナーには、開発省副大臣など９名のシエラレオネ国政府幹部が参加。第１週の東京での研修では、今後のシエラレオネへの支援の枠組みを決める協議をJICA、外務省などと行いました。第２週は広島に舞台を移し、広島の戦後復興の歴史や平和への取組みなどについて幅広く学びました。具体的には広島周辺の農業、保健医療及びインフラ施設の視察や平和記念公園での献花などのほか、秋葉・広島市長と約30分に渡って平和や軍縮をテーマに話し合いました。また、10月29日に広島市内で開催した公開シンポジウム「広島の復興をアフリカ支援にどう生かすか」では、広島大学平和科学研究センターの篠田英朗助教授らのパネリストや一般市民と活発に討議し、交流を深めました。

研修員の代表で開発経済計画省の副大臣を務めるモハメッド・シセイさんは、「実際に広島に来て悲惨な被爆からの復興の様子を学べて、とても貴重な経験でした」と研修の成果を強調していました。今後JICA中国では、アフリカ地域の平和復興をテーマにした集団研修の実施を検討しており、引き続き平和都市「HIROSHIMA」のリソースを活用した研修コースを実施していきたいと思っています。



平和公園の慰霊碑に献花する
シエラレオネの研修員

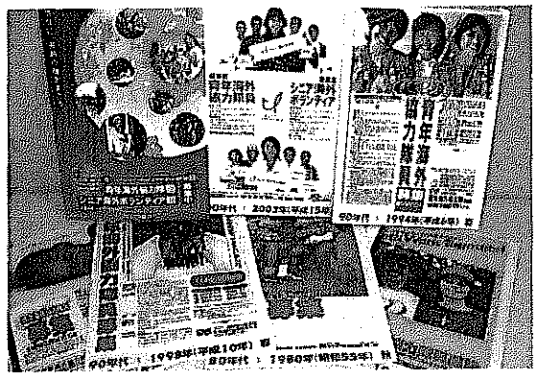
平和記念資料館を視察する研修員



公開シンポジウムで討議する研修員

海外ボランティア事業

JICA中国では、開発途上国の住民と一体となって行う協力活動を志望する個人を募集し、海外に派遣しています。その中の一つ、青年海外協力隊事業は、2005年に40周年を迎えました。JICA中国では、募集期に行われる一般募集説明会の他、帰国隊員の報告会を実施したり、大学や各種セミナー・イベント等でボランティア事業の紹介を行ったりするなど、ボランティア事業の理解促進のための様々な活動を実施しています。



JICA海外ボランティア募集ポスター

4月

4/10~5/20
平成17年度春募集、一般募集説明会実施
(14都市、23回)
4/28　原爆展実施隊員による帰国表敬
(広島県、広島市)

【特別説明会】
鳥取大学農学部(4/8)
YMCA米子医療福祉専門学校(4/13)、
鳥取大学医学部保健学科(4/14)
鳥取短期大学(4/14)
米子文化服飾専門学校(4/14)
島根大学(4/27)

5月

5/9　帰国表敬（東広島市）
5/20　帰国表敬（鳥取県知事）

【特別説明会】
鳥取県立農業大学校（5/17）

6月

6/5　春募集協力隊一次選考
6/6　岡山県帰国表敬

7月

7/7　帰国報告会（島根県）
7/9-10　中国5県OB会総会

8月

8/17　帰国報告会（広島市）
8/22　現職教員特別参加制度事後研修
（帰国報告会、広島県教委）

9月

9/2　帰国報告会（岡山県OV会）
9/28　帰国報告会（島根県）

10月

10/10~11/16
平成17年度秋募集、一般募集説明会実施
(14都市、23回)
10/24　鳥取県ボランティア家族連絡会

【特別説明会】
山口県立東部高等産業技術学校（10/4）
鳥取短期大学（10/5）
岡山大学医学部保健学科（10/14）
吉備国際大学（10/18）
島根大学（10/19）
鳥取大学工学部（10/25）
鳥取県立米子高等技術専門学校(10/26)

11月

11/14　広島県OB会帰国報告会
11/27　鳥取県OB会帰国報告会

【特別説明会】
くらしき作陽大学（11/7）
山口県立萩看護学校（11/28）
新見公立短期大学（11/29）
岡山大学（11/30）

12月

12/4　秋募集協力隊一次選考

【特別説明会】
ノートルダム清心女子大学（12/7）
島根県立看護短期大学（12/7）
山口農業大学校（12/9）
岡山大学教育学部（12/14）

1月

1/28　教育セミナー中国（呉市）
1/29　岡山県ボランティア家族連絡会
1/30　秋募集総括会議

2月

2/5　帰国報告会（岡山県）
2/23　広島県教育委員会現職教員特別参加制度事前研修
2/22　帰国報告会（島根県）

3月

3/5　広島県ボランティア家族連絡会
3/18　中国5県OB会ブロック会議
（青年海外協力協会主催）
3/26　山口県家族連絡会

協力隊40周年に「活動を振り返って」

随林（ずいりん）　吉衛（きちえ）
（昭和40年1次隊派遣　派遣国：ラオス　職種：野菜）

随林　吉衛OB

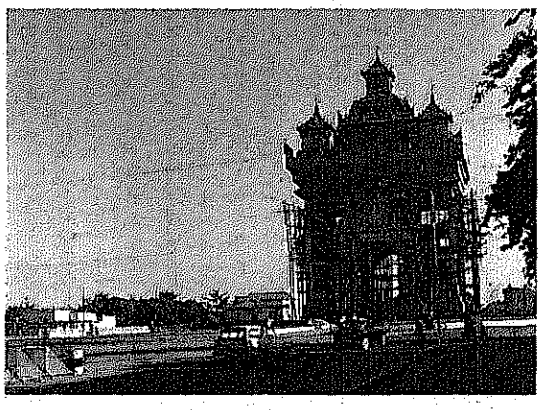
昭和30年代に入り、もはや戦後ではないという言葉が日本国民の中で囁かれ始めた時代、東京オリンピックが華々しく開催され、日本が世界からあらゆる事で注目された時代、日本の協力隊事業が始まりました。思い起こすと早や40年の月日が経過しました。

協力隊事業の推進役の中心に、当時自民党青年局の海部俊樹元総理と青年団運動の国士、末次一郎さんがおられました。日本の青年を海外に派遣し、現地の若者と一緒になり、共に汗を流し、お互いの国を理解し、友好を計る事が基本でした。現在の様に語学の研修が整備されている訳でもなく、「何とか派遣された国で２年間過ごして帰国しろ」、これが全てでした。

今から思えば、無茶な事の様に思う人もいるでしょう。しかし、この事が我々最初の派遣隊員31名に課せられた使命でもあり、個人の責任をしっかり果たすと言う連帯感、意識改革を与えてくれました。

ラオスには５名が派遣されました。それぞれの技術をラオスの若者と共に汗を流した事が、思い出されます。私は、野菜隊員として派遣されました。特別な受け入れ機関がある訳でもなく、農村に入り周囲の農家を巡回指導しました。現在の様にしっかりした要請開拓もできておらず、何でも知っている事は相手に教えたり、言葉も教えてもらったり、楽しい素晴らしい経験でした。大使館としてもたいして面倒は見てくれず、たまに日本食をご馳走になったくらいです。全てが、隊員自身の考えで行われていました。現在と比較すると、昔の方が本当の協力隊活動の様に思います。時代は変化しても、青年の未知なるものに挑戦する意欲、好奇心は不変です。40年を振り返り、隊員として参加した事に誇りを持ち続けてゆきます。

昔の事は、忘れる事も必要かもしれません。しかし、たまには思い出して過去を語る事も一興でしょう。有難うございました。


建設中の独立記念塔（首都ビエンチャンの象徴）

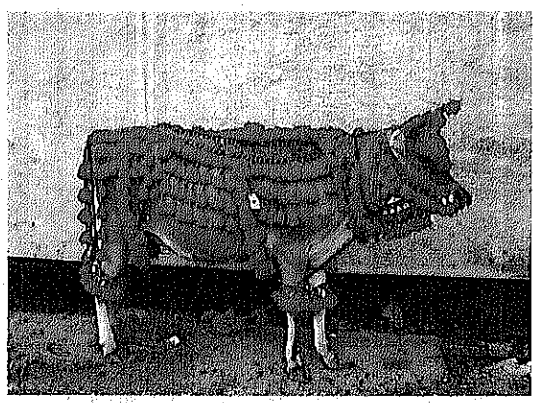
現地活動に思うこと（シニア海外ボランティア）

沖　愛子
（平成15年度派遣　派遣国：トルコ　指導科目：観光一般）

私は、一昨年の10月から一年間、トルコのトラブゾン市に観光開発の要請でシニア海外ボランティアとして派遣されていました。丁度去年の今頃に、トラブゾン県西部山間のトンヤという小さな町の「ミルク祭」に行きました。その地方は、ナチュラルな乳製品で有名です。使われる塩も自然塩で、おいしさも抜群です。今、世界的に自然派思考（嗜好？）ですが、トンヤのバターを一口食べるだけで、きっとそこへ行ってみたいと思われるでしょう。ですから、それをもたらしてくれる牛は、大事な家族の一員です。もしかしたら、人間よりも大切にされているかもしれません。

春になり雪が溶けて麓の村から高原に移る時に、その牛に施す飾りつけの大会もありました。当の牛はどう思っているかわかりませんが、皆一生懸命に飾ってあげていました。評価の程はさまざまですが、自然な環境の中で人や動物が協力している様子は、ほほえましいものです。

何が自然かという定義にもよりますが、そういった環境の中で素朴に暮らしている暖かい人達には、何か呼び覚まされるものがあります。私達も指導するというより、現地の方から学ぶ姿勢も大切です。この様な環境を崩さない観光化で、地域の活性化に繋がればと、今でも切に思っています。



「飾りつけコンテスト」の牛

ミルク祭でダンスを披露する少女達

ザンビア国理数科教師グループ派遣
(IDEC－JOCV連携プログラム)

JICAでは、青年海外協力隊（JOCV）事業を活用した大学との連携にかかる全国初の試みとして、「IDEC-JOCV連携プログラム（ザンビア国理数科教師グループ派遣）」を実施しています。2002年度から開始されたこのプログラムは、広島大学大学院国際協力研究科（IDEC）と共に実施しているものです。IDECに在学中の学生が、青年海外協力隊員としてザンビアに行き、現地で教育活動を行うものです。

具体的には、①JOCV隊員としてザンビア国に赴き、主として教育分野の発展のための活動を行う、②現地でのJOCV活動と平行し、これらの現地活動での成果を修士論文にまとめる（修士の学位が取得できる）、③大学指導教員の指導及び集中講義等の活用により、標準として３年６ヶ月での修了が可能です。

本プログラムでは、これまでに11名の学生がザンビア各地で活躍しています。

《このプログラムで実際に派遣された大学院生の声》
広島大学国際協力研究科修了生
IDEC-JICA連携プログラム一期生
理数科教師（14年度２次隊員）
谷口　正明

私は、広島大学大学院国際協力研究科（IDEC）に在籍しながら、2002年12月から2005年３月までザンビア共和国にて青年海外協力隊の理数科教師として活動しました。

従来の院生として参加した場合、その活動期間に休学しなければならないのでしょうが、私は2002年よりIDECにて始まったこのIDEC-JICA連携プログラムによって、活動期間中に単位を取得できるという恩恵を受けることができました。現地では、理数科の教員として教壇に立つとともに、教員研修センターにも配属され、そこを通して調査研究を行いました。

ザンビアの生徒たち

帰国後は、修士論文をまとめるだけでなく、自分の大学院卒業後の進路のことも考えなくてはなりません。このプログラムで派遣された第一期生３名のうち、私を除く２名は博士課程後期に進学しました。私は民間企業に就職することができましたが、それは日本国内での社会経験がなくとも、帰国後「大学院新卒」として扱われたことが有利に働いたと思います。

本プログラムのHP：http : //home.hiroshima-u.ac.jp/intlscim/top.html

草の根技術協力事業

草の根技術協力事業は、国際協力の意思をもっている日本のNGO、大学、地方自治体及び公益法人などの団体からの提案を受け、開発途上国への国際協力活動について、JICAがNGOなどの団体との共同事業として実施するものです。協力期間は、3年以内（但し、地域提案型は3年度内）です。団体の規模や種類に応じ、次の3種類の事業形態があります。

●草の根協力支援型
国内での活動実績はあるものの、開発途上国への支援実績が少ないNGOなどの小規模な団体向け。

●草の根パートナー型
開発途上国への一定の支援実績を有しているNGOなどの団体が、これまでの活動を通じて蓄積した経験や技術に基づいて提案・実施するもの。

●地域提案型
地方自治体からの事業提案により、日本の地域社会が持つノウハウ・経験を活かし、現地での技術指導や開発途上国からの人材の受け入れを通して、途上国の人々や地域の発展に役立つ協力活動を支援するもの。

保健ボランティア・助産師による健康教室
（スリランカ・ワウニア地区基礎保健サービス復興支援事業）

4月
●草の根協力支援型案件随時募集
以下継続案件の実施契約
○「南アフリカ共和国・フリーステート州ツェツェン村農業開発支援事業」（支援型）
○「スリランカ・ワウニア地区基礎保健サービス復興支援事業」（パートナー型）
○「ミャンマー・コーカン特別地域プライマリーヘルスケアプロジェクト」（パートナー型）
○「中華人民共和国・岡山ー上海高齢者介護教員養成センター」（パートナー型）

5月

6月
○「モンゴル・堆肥化施設管理・運営計画指導」（提案型）

7月
●草の根パートナー型第1回募集締切
○「ザンビア・ルサカ市非計画居住地区結核対策プロジェクト」（パートナー型）

8月
●地域提案型要望調査開始

9月
●草の根パートナー型第1回採択内定案件決定
●地域提案型要望調査締切

10月

11月
●草の根パートナー型第2回募集締切
○「パラオ共和国・パラオ共和国での学校検診実施のための技術協力」（支援型）○「カンボジア・カンボジア元気な学校プロジェクト」（提案型）

12月
●地域提案型採択内定案件決定

1月

2月
●草の根パートナー型第2回採択内定案件決定
○「カンボジア・小学校体育科指導書作成支援プロジェクト」（パートナー型）
○「中華人民共和国・威海市個別研修環境保全パートナーシップコース」（提案型）

3月

草の根パートナー型
ザンビア国「ルサカ市非計画居住地区結核対策プロジェクト」

特定非営利活動法人AMDA　木下　真絹子

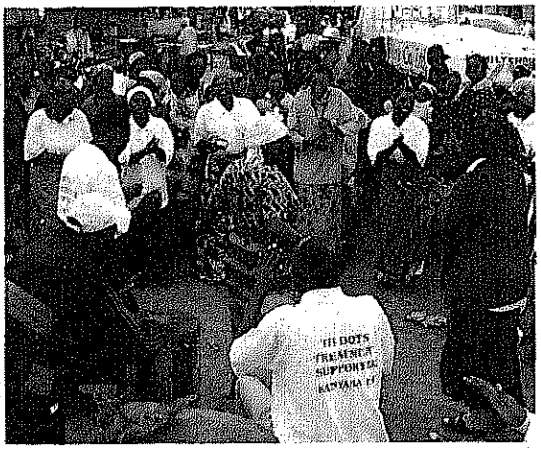
特定非営利活動法人AMDAは、JICAから「草の根技術協力事業」の業務委託を受け、2005年7月からザンビア国ルサカ市にある2つのスラム地区で結核対策プロジェクトを実施している。

成人のHIV感染率が21.5%と世界でも6番目に高い国ザンビア国では（UNAIDSデータ）、1984年にザンビア国内でHIV/AIDSの発生が確認されて以来、結核の国内患者数はそれまでの5倍に急増している。免疫力の低下しているHIV感染者/AIDS患者は結核に感染しやすいことから、現在ザンビア国の結核患者の8割近くがHIV感染者/AIDS患者であるとの報告も出てきている。

このような状況に対応するために、ザンビア国では1999年から治療プログラム（DOTS=Directly Observed Treatment Short Course）が導入された。しかし保健行政機関は慢性的な人材不足と財政難に陥っており、ルサカ市のDOTSは充分に機能していないのが実情であった。

そこで1998年から保健衛生・開発プロジェクトを、実施してきたAMDAは、ルサカ市ジョージ地区の一部で保健行政機関との連携を図りながらコミュニティレベルで結核治療の効果を高め、結核の蔓延を防止するためにパイロットプロジェクトを2003年から開始し、2005年にはジョージ地区およびカニヤマ地区に活動を拡大した。当プロジェクトでは、保健ボランティアの能力を最大限に活用し、コミュニティの人々から養成された約150人の結核治療サポーター（ボランティア）を選出し、ヘルスセンターのみならずコミュニティでの投薬モニタリング、患者訪問ケア、保健教育などの活動支援を行っている。さらに、保健教育活動やキャンペーンなどを通じた啓発活動の実践により、住民の結核に対する偏見を軽減し、感染防止を促している。その結果結核とHIV/AIDSに関する理解が深まること、コミュニティ内の広域DOTSシステムが確立されることを期待している。直接受益者は、地域の結核患者約7,500人とその家族37,500人、そして潜在的な結核患者及びHIV感染者/AIDS患者の合計70,000人である。最終受益者は、ふたつの地区に居住する一般住民約350,000人。将来的にはサポーターだけで、これらの活動が継続されるよう彼らの自立を支援していくことも、プロジェクトの大きな柱の一つである。

カニヤマ保健センターの結核コーナー



カニヤマ地区マーケットでＡＭＤＡが行う結核に関する保健教育

草の根パートナー型
「カンボジア小学校体育科指導書作成支援」

特定非営利活動法人ハート・オブ・ゴールド　山口　拓

体育を通じて、カンボジアの子どもたちの健やかな未来を創ろう！

特定非営利活動法人ハート・オブ・ゴールド（本部・岡山市）は、2006年２月からカンボジア国教育省学校体育スポーツ局を支援するJICA草の根パートナー型支援事業「カンボジア小学校体育科指導書作成支援」を開始しました。

この背景には、ポルポト政権崩壊後のカンボジア政府が、失われた過去の遺産を取り戻し、社会的な混乱に終止符を打つために、総合的な教育開発及び人材育成を急務としたという事情があります。ハート・オブ・ゴールドは2005年12月までの５年間、カンボジア体育指導者と小・中学生の体育授業を向上させる目的で、教育省担当局と共に巡回形式の指導会を設け、継続的な支援を展開していました。それらの活動を継続する中で、2005年１月、教育省側から、「体育授業が定着しない根源的な原因を改善する必要がある。その原因を改善しうる指導書の作成に、是非、手を貸して欲しい」との要請がなされました。

本プロジェクト開始にあたっては、指導書作成の前段階として統計資料がなく、統計資料や資料分析などから開始する必要がありました。そのためハート・オブ・ゴールドは、2006年２月に「統計資料作成および体力測定実施に関する指導」を目的に体力測定の専門家２名を派遣し、行政官10名と小学校教師26名の育成を図るべく、ワークショップを開催しました。

ワークショップの終了後には、参加者の配属校に赴き、ワークショップの成果が現場で生かされているか調査を行いました。それぞれの調査校では、ワークショップで学んだ知識をそれぞれの状況に応じて創意工夫するなど、積極的な姿勢で体力測定に取り組んでいた事などが確認されました。また、統計資料も然る事ながら、指導書を作成する教育省担当行政官の知識と意識の向上が不可欠であることから、2006年３月には、体育教育の専門家を派遣し、３日間の専門技術ワークショップを実施しました。過密なスケジュールであったにもかかわらず、そして休憩時間であったにも関わらず、専門家に対する活発な質問がなされるなど、参加者の熱心な姿勢が見られました。ワークショップの最後の質疑時間でも、予定時間を大きく上回る質問が寄せられ、教育省行政官の体育教育の振興にかける真剣な思いを感じとる事が出来ました。

今後は調査校で実施した体力測定と学校体育・スポーツ環境調査の結果の分析と日本の体育科指導要領の翻訳を行い、体育科指導書の骨子となる指導要領の草案作成に取り組んで行く予定です。

教員を対象とした体力測定方法の研修

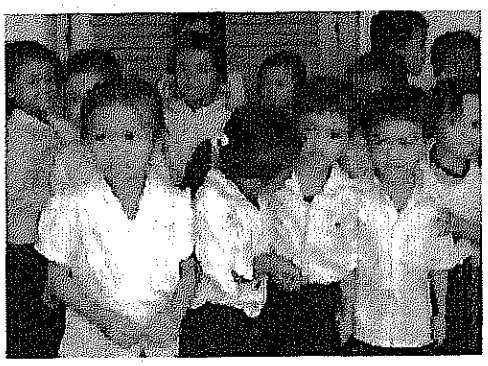
草の根地域提案型
「カンボジア元気な学校プロジェクト」

ひろしま平和貢献ネットワーク協議会事務局長
（広島県総務企画部国際企画室長）
古矢　久雄

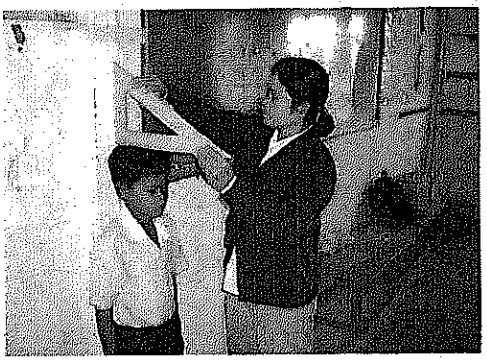
人類史上最初の原子爆弾による惨禍を経験した広島県では、平成15年３月「創り出す平和」の理念に基づく「ひろしま平和貢献構想」を策定し、復興した広島の経験や蓄積された人材・施設を活用した様々な取り組みを進めています。その１つである紛争終結地域を対象とした「復興支援プロジェクト」において、最初の支援地域として、復興に力を注いでいるカンボジアを選定しました。

学校運営研修

平成15年度に現地調査を実施した結果、同国においては、特に教育及び保健医療分野における支援ニーズが高いことが明らかになりました。引き続き16年度に、両分野の専門家等による詳細調査を実施し、17年度以降の具体的な支援策を検討しました。


カンボジアの元気な子供たち

そして、平成17年度からは、JICA草の根技術協力事業（地域提案型）により本格的に支援活動を実施しています。活動地域は、シェムリアップ州プク郡ササースダム。アンコールワットで有名なシェムリアップから車で約1時間の農村地域です。この地域の小学校を対象に、学校運営の改善、教科指導法の改善、環境と健康の重要性認識に向けた活動を展開しています。地方自治体として復興支援に取り組む新しい試みであり，JICA中国やJICAカンボジア事務所の方々から御協力や御意見をいただき，試行錯誤を繰り返しながら、教育事務所や小学校，保健センターなどでカンボジアの人々と一緒に活動して、カンボジアの将来を担う子供たちが、健康で元気に、思う存分学べる環境づくりを目指しています。


健康診断

開発教育支援・市民参加協力推進事業

もっと、国際協力を身近に感じて欲しい！
開発途上国について知って欲しい！
JICAでは、これまでの国際協力活動を通して蓄積してきた開発途上国や国際協力に関する様々な情報や経験を、学校や地域社会に還元しています。海外で活躍した青年海外協力隊員の出前講座や研修員の学校訪問など、楽しく参加して、たくさん学べる機会をご用意しています。皆さん、奮って申込み・ご参加ください。

JICA中国施設見学時のフォトランゲージ・ワークショップ

時期	市民参加協力推進事業	教師海外研修	国際理解教育研修会	研修員の学校訪問	高校生国際協力体験プログラム	国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト
4月		募集	募集			
5月		5/9 応募締切 5/16 結果通知 5/28-29 第1次派遣前研修	5/13 第1次締切 5/20 第1回通知 5/28 第1回研修会	募集 5/27 第1回応募締切	募集	
6月		6/18-19 第2次派遣前研修		6/10 第1回決定通知 JICA中国 ホームページで再募集		6/1 募集開始
7月	平成17年度市民参加協力推進事業 随時実施	7/30-8/12 海外研修	募集		7/1 応募締切 7/15 決定通知	募集
8月					8/18-20 実施	
9月		9/5 研修報告書提出締切	9/5 第2次締切 9/12 第2回通知		9/30 プログラム後のレポート/エッセイコンテストのコピー提出締切	9/22 募集締切
10月		10/1-2 第1次帰国後研修	10/1-2 第2回研修会			
11月			募集			
12月		12/22 実践報告書提出締切	12/12 第3次締切 12/19 第3回通知			
1月		1/28 第2次帰国後研修	1/28 第3回研修会			1/12 入賞者発表
2月	18年度募集 2/22 募集締切					
3月	3/31 共催決定通知					3/18 表彰式（JICA中国）

視聴覚資材の貸し出し	JICA中国施設見学	国際協力出前講座
随時申込受付・実施		

詳細は、JICA中国HPをご参照ください。

広げよう！市民の輪
「フィリピンと広島を結ぶ平和交流テレビ会議」

作増　良介
（平成15年3次隊　派遣国：フィリピン　職種：青少年活動）

第二次世界大戦の戦禍の地、広島とフィリピンのバターン。この二つの地から平和の波を起こそうと終戦60周年に当たる昨年、両地の高校生が平和をテーマにした対話交流会を行いました。この交流会ではJICAネットというＴＶ会議システム（JICA中国とJICAフィリピン事務所を繋ぐ会議）により、大スクリーン越しに互いの顔を見ながら臨場感あふれる対話交流が行われました。

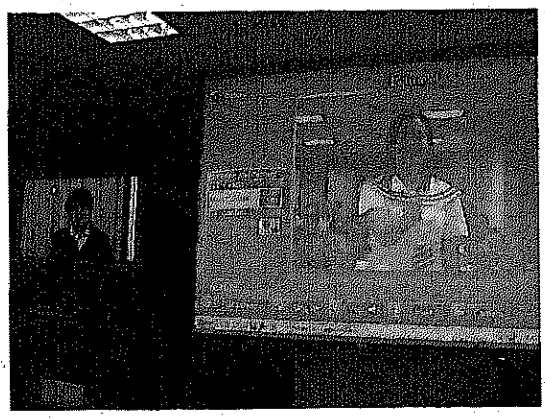
私は、フィリピンのバターン州で青少年活動という職種で派遣されています。配属先の市役所から、スポーツ以外で青少年の交流活動を企画してほしいとの要望がありました。そこで戦時中の日本軍による「死の行進」で有名であり、現在はフィリピンの平和の象徴の地となっているバターンと、原爆の惨禍から味わい、平和についての思いを真摯に受け継ぐ広島の高校生が平和について議論し、学びあう交流会を企画しました。

この交流会に先立ち、私はバターンでは広島への理解を広げようと「原爆展」を開催し、地元の小学校や高校を巡回しました。また広島側でも、戦時中にバターンで行われた悲劇「死の行進」を紹介したDVDを鑑賞するなどして互いの歴史を学び合いました。

こうして互いにしっかりとした事前学習を行った上で、昨年８月に広島県立安古市高校とバターン国立高校との間で、また11月には私立広島女学院高校とバターン国立高校との間で、平和交流会が行われました。交流会では、バターン、広島双方についてのイメージを互いに率直に語り合いました。また、ユダヤ人にビザを発行した日本人外交官杉原千畝氏の行動について、よく考え抜かれた意見の交換が行われ、会場を沸かせました。この交流会に参加した広島のある高校生は、次のような感想を寄せています。

「私は、外国の人たちとただ普通におしゃべりするのではなく、何かのテーマについてキチンと話し合ったのは初めてでした。日本人ではない相手が意見を言い、『私もそう思う！あなたの意見に賛成！』と思えることの素晴らしさに感動しました。」

こうした「共感を呼ぶ」という作業を地道に繰り返すことで、平和は作られていくのだと強く実感できた交流会でした。広島とバターンの高校生たちは、過去の悲惨な歴史を踏まえつつ、よりよい未来のために動き出してきています。



平和をテーマにしたTV対話交流会

「教師海外研修」
参加体験談

岡山県立備作高校教諭　村井　容子

教師海外研修でガーナに行ってきました！

「ガーナといえば？」「チョコレート！」日本国民のほとんどが、そう答えるでしょう。もちろん、私も、私の生徒も同じ考えを持っていました。ガーナに行くまでは…。

今回ガーナ共和国を訪問し、マラリアの原因であるハマダラ蚊との戦いやバケツ一杯の水しか使えないお風呂、整備されていない道路での長時間ドライブなどから開発途上国の現状や問題点を体感することができました。また、設備の整っていない学校での150人一斉授業など、過酷な状況の中で奮闘する青年海外協力隊の方々の姿に、国際協力の在り方を考えさせられました。人見知りすることなくいつも笑顔を絶やさないガーナの人々など、チョコレートだけではない、ガーナの多様な側面を見ることができました。

青年海外協力隊と苗畑で

現地での研修は終わりましたが、私たち参加者の研修は今なお進行中です。自分たちが見聞きし、感じたことを生徒に伝えながら世界に目を向けさせるために、私たちはより分かりやすい授業作りに取り組んでいます。「ガーナのカカオ農園は、環境問題や児童労働などいくつかの問題を抱えています。その問題を知った今、私は大好きなチョコレートを食べることができません。私が心おきなくチョコレートを食べるために、日本人としてできる国際協力を考えよう。」（授業『チョコレート問題』より）

「ガーナといえば？」、「チョコレートだけじゃない！」何気なくチョコレートを口にするとき、それが作られるまでの背景とその過程にかかわるガーナの人々の存在を感じられる、日本の高校生が少しでも増えてくれればと願っています。

岡山市立操明小学校教諭　原田　緑

この夏、JICA教師海外研修でケニアに派遣された。青年海外協力隊が活動している現場に行き、ケニアの子どもたち、ケニアの人々に出会った。ケニアの自然を守るために活動している協力隊員に、出会った。初めてのアフリカは、感動の連続だった。ケニアの大地、空、海、そして人は、今も私の中で輝いている。まさに、この研修のテーマ「ココロとカラダにしみるケニア」だった。

私は、操明小の子どもたちに伝えたいことを、たくさんかかえて帰国した。帰国後も、ケニアの協力隊は、私と同じ思いで子どもたちにメッセージを伝えてくれた。そして、ケニアと私の小学校をつなぐTV会議が実現した。

岡山では、アフリカとは初のＴＶ会議。様々な人々が応援してくれた。テレビや新聞でも報道された。操明小の子どもたちにとって、ケニアは忘れられない国になった。青年海外協力隊の活動に興味をもち、もっと知りたいと思う子ども、地球の自然を守るために、自分は何ができるか考える子どもが増えた。

モンバサで女の子達と

私のケニア訪問から、ケニアの人々や自然に思いを寄せ、協力隊の活動を応援する思いが、子どもたちに広がっていった。この思いが、どのように成長していくか楽しみである。私にこのような機会を与えてくださったJICA中国の皆様に、感謝している。

JICA開発教育支援事業を活用した事例紹介

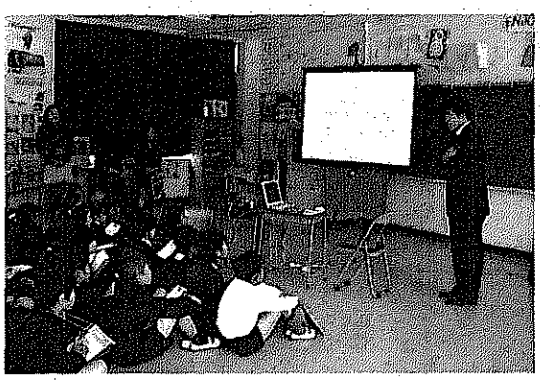
広島市立久地南小学校

JICAでは、世界各地に派遣された青年海外協力隊員の「知見の還元」と先生方の「考える機会の提供」をキーワードに、開発教育支援事業を実施し、学校現場の支援を行っています。ここでは、JICA中国の提供する各種事業を年間教育カリキュラムの中で効果的に組み合わせ、学校ぐるみで国際理解教育に取り組んでいる広島市立久地南小学校の事例を紹介します。

広島市立久地南小学校には、教師海外研修に参加された先生が2名（平成15年タンザニアコース、平成16年度エチオピアコース）いらっしゃいます。平成16年度は、JICA中国の開発教育支援事業を活用した以下の取り組みで、年間教育カリキュラムを構成されました。

2005年5月　JICA国際理解教育研修会への教員参加

2005年6月　国際協力出前講座（青年海外協力隊体験談：ザンビアについて）



国際協力出前講座
(ザンビアについて)

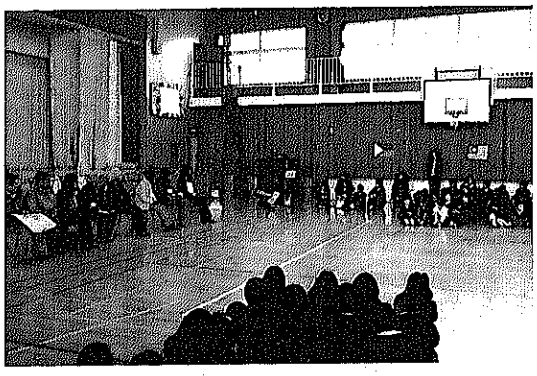
2005年8月　国際協力出前講座（教職員を対象とした校内研修での参加型学習の紹介）

2005年10月　JICA国際理解教育研修会への教員参加
メール交流開始(マレーシア、中国、バングラディシュ、インドネシア、ラオス、スリランカ、ベトナムの青年海外協力隊らと)

2005年11月　国際協力出前講座（青年海外協力隊体験談：スリランカについて）

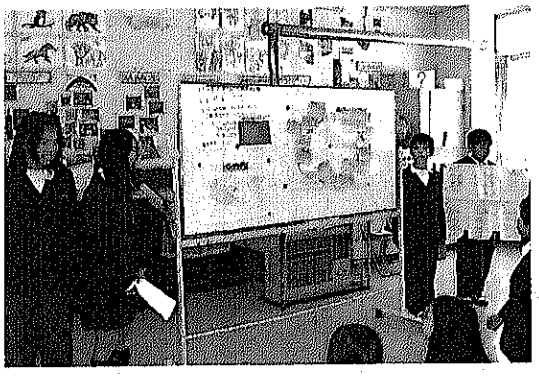
2006年１月　JICA国際理解教育研修会への教員参加

JICA研修員の学校訪問（食品加工・保全技術コース）

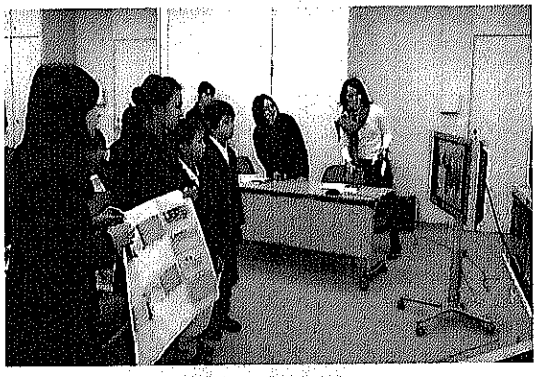


研修員の学校訪問

JICA中国施設見学（中国、マレーシア、ベトナムの青年海外協力隊員とのテレビ会議）



少年海外協力隊の活動計画発表！
（JICA中国施設見学プログラム）



JICA－Netを使って
海外協力隊員とテレビ会議

《中山先生の声》

『本校は、従来からJICA中国と連携しつつ、開発教育のプログラムや交流活動を中心に授業を行ってきました。昨年度も、出前講座や現場の協力隊員とのメール交流、さらにJICA－NET（テレビ会議）にチャレンジしたり、JICA研修員との交流会などを実施しました。「総合的な学習」のゴール地点を、JICA－NETによる少年海外協力隊の活動発表に設定することにより、子どもたちの動機付けやカリキュラム編成が容易になりました。中でも６年生は、卒業文集の中で、将来の夢を協力隊員となって世界のことを学びたい、そして人の役に立ちたいと綴っている児童が見受けられました。本校としても、JICA中国と連携を深めながらプログラムの更なる開発を目指していきたいと考えています。』